

『サラゴサ手稿』における人知と学問の意義

畑 浩一郎

The meaning of human knowledge, or sciences in *Manuscrit trouvé à Saragosse*——

This study aims to highlight the meaning of human knowledge, or science in particular, in *Manuscrit trouvé à Saragosse* by Jean Potocki. The author of the novel was a scholar himself, having published several scientific works in his life. Nevertheless, in his novel, he is rather skeptical about the pursuit of science. This study focuses on three scholarly characters: Diègue Hervas, Henrique Velasquez, and his son Pedre Velasquez. Despite their zeal for science, these characters do not attain happiness in the end. As we witness their destiny, Potocki's ironic idea is presented: that despite the nobleness attached to it, the pursuit of science is merely an egoistic enterprise.

はじめに

『サラゴサ手稿』は、語のあらゆる意味でトータルな小説である。ポーランドの大貴族ヤン・ポトツキが全編フランス語で執筆したこの浩瀚な書物は、さまざまな点で型破りなものとなる。登場人物ひとつを取っても、軍人、ジプシー、幾何学者、カバラ学者、隠者、海賊、チュニスの王女、銀行家、インク作り、詩人、学者、盗賊など、挙げていけばきりがない¹。さらに、それらの人物たちが全く独自の口調で、それぞれの物語をそれぞれのやり方で語っていく。その結果、この小説はポリフォニックな音色を獲得することになり、ある時は滑稽で、ある時は悲劇的で、ある時は身の毛のよだつおそろしさで、ある時は官能的で、ある時は学術的で…と、物語の声調を挙げていっても、これまた枚挙にいとまがない。しかもそれらの物語は互いに入り組み、交差し、中断してはまた再開するという極めて複雑な結構を有している²。

作品の大枠としては、主人公アルフォンス・ヴァン・ヴォルデンがスペインのシエラ・モレナ山脈をさまよった六十一日間の日誌という体裁を取る。十日ごとにひとつのデカメロンとしてまとめられ、六つのデカメロン（最終の第六デカメロンのみ十一日）でもってこの小説は構成される。主な登場人物としては、主人公アルフォンスに加えて、ジプシーの首領、カバラ学者ウゼダ、その妹レベッカ、幾何学者ベラスケスなどが挙げられる。物語の舞台は、スペイン、フランス、イタリア、シチリア、マルタ、オーストリア、フランドル、モロッコ、エジプトといった地中海沿岸全域に加えて、さらには大西洋を超え、ヌエバ・エスパーニャ副王領にまで及ぶ。

¹ 論者が登場人物の数を数えあげたところ、一八一〇年版では、名前がついている者だけで実に一〇五人に上った。

² 『サラゴサ手稿』の小説構造については以下の拙稿を参照のこと。畑浩一郎『『サラゴサ草稿』研究序説』『仏語仏文学研究』東京大学フランス文学研究室、第43号、2011年、15-39頁。またその語りの独自性については、以下の拙稿を参照。畑浩一郎「ヤン・ポトツキ『サラゴサ草稿』における語りの中断について」『聖心女子大学論叢』第128集、2017年、3-26頁。

またいわゆる間テキスト性の観点から言えば、作品内で無数に引かれる著述家たちにしても、アレクサンドリアのフィロンやヘルメス・トリスメギストスといった古代の神秘思想家から、ニュートンやライブニッツといった同時代の数学者、哲学者まで、時代も分野も多岐にわたる。作者ポトツキの博覧強記ぶりには驚きを禁じ得ない。

複雑怪奇、絢爛豪華な大伽藍のような様子を呈するこの作品に対してアプローチする道筋はいくつかある。本論文では人間の知識、あるいは学問一般についての意義という観点から考察していきたい。先述の通り、この作品には碩学ポトツキが数十年に渡ってさまざまな文献から渉猟した知識、また実際に現地を旅することで——ポトツキはこの時代の人間としては突出した大旅行家である——身につけた知見が惜しげもなく投入されている。最新版の『ポトツキ全集』を編んだフランソワ・ロセとドミニック・トリエールが付けた丹念な注を読めば、ポトツキ自身がいかに広範な学識を持った「学者」であったかがよくわかる³。また『サラゴサ手稿』そのものにもポトツキと同様、豊かな教養と優れた思考能力を備えた学者が何人か登場する。彼らの物語を読んだ読者はしかし、ポトツキの学問に対する考えについてある種の迷いを感じることになる。その迷いはどこに由来するのか、それを突き止めることが本論文の目的となる。

『サラゴサ手稿』の作品成立をめぐることは、極めて複雑な事情がある。端的に言えば、最新の研究では、この小説には二つの異なるバージョンがあるということがわかっているのである⁴。これらのバージョンは、作品の構成から物語の雰囲気にとるまで全く別物と言ってよい。一言で言えば、一八〇四年版が、非常に複雑な構造を有し、内容的にもエロティックな描写や反宗教的な考察が含まれているのに対し、最終の一八一〇年版では、作品構造ははるかに整理され、また挑発的な言辞は基本的に影を潜めている。また一八〇四年版が第五デカメロン第四十五日で突如中断して

³ Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse*, in *Œuvres*, IV, 1 (version 1810), 2 (version 1804), édit. par François Rosset et Dominique Triaire, Peeters, Louvain, 2006.

いるのに対し、一八一〇年版ではきちんと物語は完結している。これらのバージョンをどう扱うかについては、研究者の間でも見解は分かれている。両バージョンは基本的に別作品と見て、それぞれ別個に考察すべきと考える人がいる一方で、ひとつのテーマをめぐって、自由に両バージョンから引用を行なって分析を行う人もいる。本論文では原則的に前者の手法を採用することにする。すなわち分析対象となるのはあくまでも完結している一八一〇年版となる。ただし一八〇四年版にも興味深い言説がいくつも見られ、それらを論じないまま済ますのはいかにも惜しい。したがって折衷的な方法ではあるが、一八〇四年版について言及する必要がある場合は、注の中でそれを行うことにした⁵。

I. 知の傲慢 「ディエゴ・エルバスの物語」

I-1 最初の苦難

『サラゴサ手稿』における学問の意義という点でまず取り上げたいのは、一八一〇年版では第四デカメロンに置かれているディエゴ・エルバスの物語である。語り手となるのは、ディエゴ自身の息子である「神に見捨てられた巡礼者ブラス・エルバス」である。むろんこの語り手自身にもさまざまな論じるべき点があるのだが、それについては後で触れよう。端的に言えば、ディエゴ・エルバスの物語は、学問に対する超人的な熱意と努力、そしてその試みの苦い失敗を語るものである。語り手によれば、ディエゴは若い頃から、学ぶということに対して強い意欲を見せ、またそれに見合っ

⁴ 正確にはバージョンは三つあるのだが、最も古い一七九四年版は、前半部分の原稿が未発見で、かつ完成度が他の二バージョンより劣る。それゆえ『サラゴサ手稿』研究からは除外されることが多いのだが、ただしこの一七九四年版についての考察も、近年始まっていることを指摘しておきたい。Voir François Rosset et Dominique Triaire, « La première version du *Manuscrit trouvé à Saragosse*, in Jean Potocki à nouveau, études réunies et présentées par Émile Klene, Rodopi, Amsterdam, 2010, p. 323-431.

⁵ 以降、『サラゴサ手稿』の本文は先述(注3)のロセとトリエールによるエディション・クリティックに拠るものとし、引用後にページ数を記す。何も指示がない場合は、一八一〇年版の本文を指し、一八〇四年版を引く場合は、ページ番号の前にその旨を記す。

ただけの頭脳を有した青年だった。「父ディエゴ・エルバスは（…）おそろしく熱心に勉強したため、瞬く間に頭角を現した。すぐに学友たちの間にライバルはいなくなり、数年後には、教授たちをものぐ知識を持っていた。」(p. 331-332) こうして早くから才能を見せたディエゴは、今後、ふたつの学問的著作で世間に挑むことになる。

ひとつめの著作は、『今明かされる解析学の秘密、全次元の無限に関する知識とともに』という題名の数学書である。これはデカルトの幾何学、ハリオットの解析学、フェルマーとロベルジャルの微積分学を統合・改良したもので、ディエゴはその執筆に一年、校正にさらに六ヶ月以上をかける。「うんざりするようなこの仕事【校正】には、執筆そのものよりも労力がかかった。」(p. 333) さらにこうした著作は通常ラテン語で書かれるものだが、より広範な読者に読んでもらうためにスペイン語で執筆される。ディエゴが自信満々で世に出したこの著作はしかし、三つの苦い苦難となって著者に跳ね返ってくる。

最初の苦難は、著作が全く売れないことである。当初ディエゴは印刷した千部は瞬く間に売り切れるものと予測し、第二版を出すための修正作業にまでとりかかっていた。だが三週間経っても、著作は一冊も売れない。さらにディエゴは国事犯として逮捕され、投獄されてしまう。これが第二の苦難である。その事情は何とも滑稽で、題名の『解析学』(Analyse)というのが、当時の財務大臣ペドロ・アラニエス氏 (Alanyès) のアナグラムであり、また『全次元の無限』というのも、「この大臣は無限に背が低く、無限に太っており、またその気質も無限に高慢で、無限に低劣なことを指している」(p. 334) という噂が立てられ、大臣の逆鱗に触れてしまうのである。ようやく牢から出されたディエゴは、自分の著作が大臣の命令で全て焚書にされてしまったことを知る。これが三つ目の苦難となる。つまり、売れないということで著書の内容が否定されるだけでなく、燃やされることによって本そのものが物理的に破壊されてしまうのである。すでにこの時点で、学問の絶対的な意義について疑問符が付されていることが見て取

れる。この疑問符は、次にディエゴが手がけることになる彼のライフワークとも言える著作において、決定的なものになる。

I-2 学問愛と自己愛

牢に入れられたディエゴは、不運を嘆きながらも学者として不屈の精神を示す。無聊を慰めるため、彼は頭の中にある知識をひとつひとつ思い出し、それぞれの学問について自分が知っていることを数え上げていくのである。

そうするとなんとも喜ばしいことに、自分が人類の持っている知識を全て身につけており、ピコ・デラ・ミランドラのように、『知りうるあらゆる知識』に関する学説を打ち立てることができることに気がついたのだ。(p. 335)

ピコ・デラ・ミランドラとは、イタリア・ルネサンス期の人文学者である。二十三歳のときに『知りうるあらゆる知識について』(*De omni re scibili*)という著作を将来執筆すると宣言するが、完成にはいたらず、彼の残した九百の命題のいくつかは異端の疑いをかけられてしまう。だがプラトンとアリストテレスとスコラ学派の思想を統合し、当時の人類の持つあらゆる知見をまとめ上げようとしたこの壮大なユマニストの試みにディエゴも連なろうとするのである。

実に野心的と言うべきである。ディエゴ・エルバスの立てた執筆計画によれば、彼の著作は「百巻からなるもので、その当時人類が有していたあらゆる知識にまたがるもの」(*Ibid.*)であった。つまりそれぞれの学問分野につき、八つ折り本にして一冊、計百冊の巨大な知の体系を作り上げようというのである。実際にポツツキはここで、百もの学問がそれぞれの巻に収められるのかについて、ひとつひとつ言及を行なっている。それは言語学に始まり、自然史、医学、物理学、戦争学、法律学、哲学、宗教学、

歴史学、数学、倫理学等々、学問名はひたすら続いていく。中には静脈学（第二十巻）や潜行戦法学（第四十三巻）、^{きしん}晷針学（第九十七巻）といった、まるで苦し紛れに生み出されたかのように思えるものも含まれる。ちなみに晷針学（la gnomotique）とは、日時計に関する学問とのことである。むろん通常の仏語辞典には記載はない。

およそ四ページに渡って、延々と列挙されていくこれらの学問名の行列は異様としか言いようがない。これだけの数の学問の名前を実際に揃えたポトツキのこだわりもまた並々ではない。そこにポトツキ自身が彼の人生で見た学問への執着を見るのは意味のないことではない。民俗学者として、年代記作家として、ポトツキは生涯において膨大な調査研究を行い、何冊もの学術書を出版している。彼が真に夢見たのはまさにこうした著作が世間に評価されることであり、また自らが学者として認知されることであった⁶。皮肉なことにポトツキの学術的著作は今では完全に忘れ去られ、彼の名が後世に残ることになったのは、彼が手すさびに書き継いだ小説『サラゴサ手稿』だけによるのである。いずれにせよポトツキは実人生では、学問の意義に対して一抹の疑念も抱いていなかった。

ただし小説の中では、ポトツキの言辞は自己批判にも近づきかねない皮肉めいたものとなる。なぜならその息子の言葉によれば、ディエゴ・エルバスの著作執筆の動機には「学問愛と自己愛」（p. 335）があったとされるからである。確かにこうした超人的な試みには学問への愛が不可欠である。そうでなくてどうして百もの異なる学問について詳細な書物を書くことができよう。ただしディエゴの場合、その傍らに自己愛が潜んでいる。そして肥大した自己愛は、次第に傲慢の方向へと傾いていく。実際、ディエゴの息子の言葉をよく観察すると、父エルバスの傲慢さを示す文句がいくつも見つかる。

⁶ この点については、次を参照のこと。Dominique Triaire, 《Jean Potocki n'est pas gentil》, in *Entretien sur le Manuscrit trouvé à Saragosse, Étude de lettres* (Université de Lausanne), 2012, p. 6.

父はそれぞれの学問の大家の書いた著作とともに勉強部屋に閉じこもり、いつの日か、この大家たちと同じ高みに達し、自分の名が彼らの名前にならぶようにしたいという楽しい希望を抱いた。(p. 332)

また生地サラマンカでは自分の才能が活かせないと考えたディエゴは、マドリードに移ることを決意する。その際も彼は「この首都のみが自分の才能に正当な評価を下すことができるのだ」(*Ibid.*)と考える⁷。確かにディエゴには学問に対する熱意があり、知識を操る能力も備えている。だが彼の学術的な挑戦は何よりも、自らの頭脳に対する並外れた自信——それは時に過信ともなる——が支えているのである。

エルバスの学問への情熱の背後に潜む自己愛は、また別の形を取ることもある。すなわち彼は自分の仕事を誰にも知られないように進め、それが完成した暁に、一挙に碩学大儒として名を知られることを望むのである。彼は若いうちからその妄想に取り憑かれている。

それに加えてディエゴには今ひとつの野望があった。匿名で著作を出版し、その真価が認められた暁に、自分こそが著者であると名乗り出て、一夜にして、誰も想像しなかった栄光に浴すことを考えていたのだ。(*Ibid.*)

全くの無名状態から、一夜にして知の巨人を名乗るに至る。果たして、学問とはそのように瞬間的に達成されるものなのであろうか。ひとつひとつ地道に努力を積み重ね、長い年月をかけて、人は学者として認められるようになるのではないだろうか。だが百巻の著作の執筆という巨大な仕事にディエゴを駆り立てるのもまた同じ妄想である。

⁷ 一八〇四年版ではこの箇所の文言は異なり、この版の特徴のひとつとなる、滑稽なまでの具体性を見せている。「サラマンカの人口二万人のうち、父が刊行を目論んでいる書物の内容を理解できる人物は六人しかいなかった。マドリードの人口は当時、十五万人を超えており、そこには少なくとも四十五人のすぐれた幾何学者がいるはずだった。」(1804, p. 441)

刊行は匿名で行なう予定だった。人々はきっとだまされて、この著作は学識者協会によって書かれたに違いないと考えるだろう。そのときにエルバスが名乗りを上げ、一夜にして、名声と、万能の人という称号を手に入れようという目論見だった。(p. 335)

「万能の人」(homme universel)という言葉に思わずレオナルド・ダ・ヴィンチが想起されるが、それはさておきここで着目しなければならないのは、この一節にポトツキが込めた皮肉である。「学識者協会」(Société de savants)という言葉は、明らかにディドロとダランベールの『百科全書』の執筆を行った百八十四人の学識者たちからなる「文学者協会」(société de Gens de Lettres)を念頭に置いているのである⁸。

I-3 オマージュか、換骨奪胎か——亜種としての『百科全書』

言うまでもなく、ディエゴ・エルバスの百巻の著作は、ディドロとダランベールが編纂した『百科全書』のパロディとなっている。だがポトツキがこの『百科全書』の亜種を小説に組み入れた意図は何なのだろうか。それを解き明かすためにまず、ダランベールが一七五一年に発表した「百科全書序論」を見てみよう。そこには、この企画の目指すところについて、次のように書かれている。

ここに第一巻をお目にかけるこの著作には二つの目的がある。まず百科全書として、人間の知識の秩序とその繋がりを出来る限り示さなければならない。次に科学、技芸、職業の辞書として [...] それぞれの学問、技芸について、それらの実態をなす基礎、本質的な詳細である一般的な原理を含んでいなければならない⁹。

⁸ ここで「文学者協会」と訳した《société de Gens de Lettres》は、日本語では「百科全書派」と呼ばれることが多い。また一八〇四年版では、この語はまさに《société de gens de lettres》(1804, p. 444) そのものとなっていることを指摘しておく。一八一〇年版で改変されたのは、さすがに言及が直接的過ぎると考えられたためか。

この一節からも、ディエゴ・エルバスが執筆する「その当時人類が有していたあらゆる知識にまたがる」百巻の著作が、このディドロ・ダランベール編纂の『百科全書』の後追いの模倣であるのは明らかである。項目がアルファベット順であるか、学問名順であるかの違いこそあれ、これらの二つの巨大な知の体系——ひとつは実際に刊行され、もうひとつは小説内の架空の創造物にとどまる——は同じ目的、かつてピコ・デラ・ミランドラが抱いたのと同じ野望、すなわち人類の全知を集積・解説するという方向を目指しているのである。ただしここで注意しなければならないのは、両者はあるひとつの点で決定的な異なりを見せているということである。それは執筆者のありようである。

ダランベールの筆による「百科全書序論」を見ると、この書物の成立については次のように書かれている。

あらゆる学問とあらゆる技芸について、たった一人で扱おうなどと考える大胆で、また考えの狭い人間がいるだろう。われわれはこれから持ち上げようとする重量を支えるため、それを分かち合わねばならないという結論に至った¹⁰。

かくしてディドロとダランベールは、合計百八十四人もの執筆陣に分配する形で、原稿執筆を依頼するのである。『百科全書』はこれらの多数の知識人がそれぞれの知見を持ち寄った共同作業の成果である。それに対し、ディエゴ・エルバスの仕事はあくまで孤独な個人作業である。先ほどのダランベールの文章を、ディエゴ・エルバスについて書かれた次の文章と比較してみよう。そうすればポツツキがそこに込めた強烈な皮肉が理解でき

⁹ Jean Le Rond d'Alembert, *Discours préliminaire de l'encyclopédie*, Édition moderne, Paris, Gonthier, 1965, p. 18

¹⁰ *Ibid.*, p. 106-107.

るはずである。

百もの異なる学問について深遠な学識を身につけるなどということは、一部の人のにとっては、人知に与えられた能力を超えるものに思われるだろう。だがエルバスがそれぞれについて一卷を執筆したのは確かなことであり、それらの本は、その学問の歴史を書き起こすことに始まり、最後は示唆に富んださまざまな見解で結ばれている。それらの見解は、その学問に新たな知見をつけくわえ、こう言ってよければ、知の領域を全方向に拡張させる方法に関するものだった。(p. 340)

ディエゴ・エルバスはこうして「知の帝王」として学術界に君臨することになるのだろうか。ディドロとダランベールの『百科全書』が世の蒙昧を開き、合理的で理性的な思考方法を世の中に広める役割を果たしたのと同様、エルバスの著作も人類の知的進歩に貢献するのだろうか。その物語の結末は、悲劇的であり、冷笑的であり、さらに滑稽でもある。

I-4 不屈の学者魂

エルバスは十五年の月日をかけ、血の滲むような努力をして著作の執筆に挑む。そして彼の望んだ通り、誰一人としてその仕事の進行に気づかないまま、著作はついに完成する。巨大な仕事を終え、一息ついた彼は気晴らしを求めて故郷の村を旅することを思いつく。旅の前に、原稿を全て製本させ、百冊の書物を一枚の棚板にずらりと並べて、その威容に満足する。その上で部屋に二重に門を下ろし、扉に封印を施すと、故郷の村へと旅立つ。しばらく旅を楽しんだ後、エルバスはマドリードへ戻ってくる。部屋に施した封蝋もそのままである。だが扉を開けた途端、彼は恐ろしい惨状を目にすることになる。

目に入ってきたのは、バラバラになって、製本も取れてしまった百巻の本の姿で、全てのページが床の上にめちゃくちゃにまき散らされているのだった… その恐ろしい光景を目にして、エルバスは気がおかしくなってしまう、かつて自分の著作であったものの残骸の只中に崩れ落ちると、完全に気を失ってしまった。(p. 342)

惨劇の原因はねずみである。作りたての糊のついた百巻の本が部屋に運び込まれ、しかもその日のうちに部屋の主人がいなくなってしまうと、これ幸いと、糊の匂いに誘われた無数のねずみが集まってきて、棚をひっくり返し、かじり回り、食べ尽くしたのだ。長年の血の滲むような努力が水泡に帰してしまったエルバスは、身体に異常をきたしてしまう。

それでも学者エルバスはへこたれない。近所に住む娘マリカの看病によって病が癒えると、百巻の原稿を元に修復すべく猛烈に仕事に取り掛かるのである。ポトツキがディエゴ・エルバスの生涯を通じて描いてみせる学問の意義への不信、少なくとも皮肉を含んだ懷疑はここで無視できない執拗さを見せ始める。エルバスは八年の歳月をかけ、その間一步も家の外に出ずに、ねずみがもたらした損害を修復する。だがそれで彼の苦労が終わるわけではない。八年の間に、それぞれの学問は進歩を遂げており、自分の原稿が古びてしまったことに彼は気づくのだ。「エルバスはまたしても苦労が増したことにため息をついた。」(p. 345) だが自らの著作を不完全なままに残すのは彼の学者としての矜持が許さない。そこでエルバスはそれぞれの学問について、新たになされた知見をつけくわえる。そのためさらに四年がかかる。まさに不撓不屈の精神である。

こうしてディエゴ・エルバスの卓越した頭脳と、超人的な努力と、不運にも負けない精神力と、長い年月とが合わさることでようやく完成した百冊の知の体系はどのように世の中に公開されるのであろうか。エルバスは書店の店主を自宅に呼び、次のように述べる。

ここにある百冊の本には、今日人類が知っているあらゆることが収められています。この知の体系を印刷すれば、あなたの書店にとって大きな名誉になるでしょうし、言わせていただければ、スペインという国の名誉となるのです。私は自分の取り分としては何も求めません。ただこの著作を印刷して、私のとてつもない労苦が無駄になることはないということにしていいただければ十分です。(Ibid.)

エルバスをこれまで突き動かしてきたふたつの情念、学問愛と自己愛が究極的に凝縮した文章である。無論、血の滲むような努力を重ねてこれまで仕事を遂行してきた彼の奮闘の根本には知への愛、学術的な向上心がある。ただその成果である輝かしい栄光は、それを成し遂げた彼自身に帰するわけではなく、むしろそれを印刷・販売する書店、さらにはディエゴ・エルバスという卓越した学者を生み出したスペインという国のものになるというのである。一見、謙虚さを装った、何という傲慢な言辞であろうか。

書店の店主は著作を注意深く点検したのちに、これらの百巻を印刷・販売することを引き受けると言う。ただしそこには条件がついている。分量を四分の一の二十五巻に減らしてもらわなければならないと言うのである。ひとつの学問分野につき一冊の著作を上梓するというのがエルバスの構想であった以上、分量を減らすなどということは到底受け入れられない。エルバスの絶望は深い。

「もういい」エルバスは深い怒りのこもった口調で答えた。「もういいから、店へ戻りたまえ。荒唐無稽な小説や、ありがたい学識を論じるがらくた本でも印刷するがよい。さぞかしスペインの恥となることだろう。私のことはほっておいて欲しい。(…)この才能がもう少し知られていれば、人々の尊敬を勝ち得ていたことだろうに。だがもう人々に求めることなど何もない。書店に求めることなどさらない。ほうっておいてくれたまえ。」(p. 345-346)

エルバスは最後まで自分の才能については一抹の疑いをも抱いていない。自分の試みが失敗したのは、ただ不運と周囲の無理解のためだけなのだと彼は考える。ポトツキがここまで執拗にエルバスの努力を踏みにじる理由は何か。それはひとつには、学問に対する世間の盲目的な崇拜と、それに従事する学者の誇りと自信とを皮肉でもって切り捨てることにある。何度も不運に見舞われながら、その度に勇気を振りしぼってそれを乗り越えてきたエルバスの人生を、ポトツキは最終的に無意味なものにしてしまう。そのことによって彼は、一見、揺らぎないものに見える学問の意義について鋭い問い直しを迫るのである。

I-5 学者と信仰

ではエルバスの不運の原因は、彼の傲慢とも言える自信だけに帰せられるのであろうか。実はもうひとつ本質的な理由がある。それは信仰心の問題である。言うまでもなく、十八世紀フランスは啓蒙主義の時代であり、誤ったキリスト教の信仰のあり方は時に哲学者による厳しい批判の対象となった。フランス革命前と革命後、ポトツキは実際にパリに滞在し、こうした知的風土を肌で感じている¹¹。無論、理性に導かれた学問と、信仰を土台とする宗教は相容れないというのはあまりにも図式化された構図で、到底この時代の精神的風景を描き出しているとは言えない¹²。ただディエゴ・エルバスの物語に見られるのはそれとはやや異なる価値観である。

エルバスは、自分が被った不幸を考えるうちに、天地創造について思いを巡らせる。そしていつもの如く、それを科学的に解説しようとする。人間や動物、植物、鉱物などの成り立ちを考え、生命とは何かを理論的に解

¹¹ Voir François Rosset et Dominique Triaire, *Jean Potocki, biographie*, Flammarion, 2004, p. 115 et suiv., p. 185 et suiv.

¹² 啓蒙時代を代表する哲学者ヴォルテールは、一般にキリスト教に批判的であったと見なされることが多い。だが一七六一年のカラス事件とそれを基に執筆した『寛容論』（一七六三年）を見れば分かるように、彼が反発したのは行き過ぎた狂信であり、寛容の精神に基づいた信仰そのものを否定したわけではない。この点に関しては、次の論文が示唆に富む。伊達聖伸「ヴォルテールとシャトーブリアンの宗教批判 — 「寛容」から「自由」へ」『東京大学宗教学年報』第31号、2014年、17-34頁。

明しようとする中で、フェニキア人の歴史家サンキュニアトンの著作と出会い、その記述から生命の源には雷が関わりと信じるようになる。「不幸な学者エルバスは、雷の持つ成分によってはじめて生成酸が組成されたのだということを証明するために、こうした異教徒の宇宙開闢説に依拠することをいとわなかった。」(p. 347-348)

極端なまでに科学的探求を追い求めるディエゴ・エルバスとは対照的に、無知と単純な信仰心で生きるのがエルバスの義父である。エルバスはマリカと結婚し、一子を設ける。それが物語の語り手であり、神に否定された巡礼者となるプラス・エルバスである。幼いプラスは父の仕事の妨げになるというので、靴づくりをしているマリカの父に預けられる。このプラスの祖父こそ、ディエゴ・エルバスの不幸の真の原因を見抜いている人物である。臨終の床で、彼はプラスを呼んで、次のように述べる。

プラスや、わしのかわいいプラス、わしからの最後の祝福を受けるがよい。お前は、学識ある父親から生まれた。あやつの学識がもっと狭いものであればよかったろうに！ お前にはさいわいなことだが、じいちゃん、神さまを信じることに、自分の行いにも単純な人間じゃ。お前のことも、同じように単純に育ててやった。おやじの例にならってはならぬぞ。あの男は、ここ数年、神さまへのお祈りをほとんどしていないし、異端の者ですら恥ずかしく思うような考えを抱いているのじゃ。プラスや、人の知恵などというものには用心するがよい。もうしばらくすると、わしはそのことをどんな哲学者たちよりもよく知ることになる。(p. 348)

プラスの祖父によれば、ディエゴ・エルバスの不幸はまさに信仰心の欠如から来ているのである。無論、パスカルの例を挙げるまでもなく、学問と信仰心とは必ずしも相容れないものではない。ただしディエゴの場合、学術的な客観主義を突き詰めることによって、否応無く無神論へと追い込ま

れていく。そしてひとたび学問が持つ価値・意義に対する絶対的な信頼が
わずかでも揺らいだ時、彼を待つのは破滅に他ならない。

臨終の言葉が表しているように、プラスの祖父の死は穏やかで幸福に満
ちている。信仰心と単純さが死に対する恐怖から彼を救ってくれるのであ
る。それに対し、ディエゴ・エルバスの死は悲惨である。彼は自分の人生
を呪いながら毒の杯を仰ぎ、自死にいたるのである。彼が最後に口にする
自らの人生に対する呪詛の文句は、学者という存在の究極的な虚しさを表
している¹³。

おお、私が最後に目にする天体の放つ最後の光よ、なぜお前は私の誕
生の日を照らしたのだ？ 私は自分が生まれることを願ったか？ な
ぜ私は生まれてしまったのだ？ 人は、私には魂があると言った。私
は肉体を犠牲にしてまで、その魂と取り組んだ。私は頭脳を鍛えた。
だがそれはねずみたちに貪り食われてしまった。本屋には馬鹿にされ
た。私の後には何も残らないだろう。私はこのまま死ぬ。生まれてこ
なかった場合と同じように、無名なままで。虚無よ、おまえの餌食を
受け取るがよい。(p. 349)

ディエゴ・エルバスの物語に見られるのは、学問・知識に対するポトツキ
の徹底的な懐疑である。ディエゴの度重なる試練と苦杯は「学問による人
間の向上には意味があるのか」という問題を突きつけてくる。知的な進歩
は本当に人間を幸福にするのか、むしろ単純で無知な信仰心にこそ幸せは
求められるべきではないのか。十八世紀の啓蒙の時代が過ぎ去ろうとする
時期に、まさに知の意義そのものが疑問に付され、学者の存在価値につい

¹³ このディエゴ・エルバスの自死を、作者ポトツキ自身の自殺と結びつけて考えたがる研究
者は少なくない。例えば以下を参照。Pierre Swiggers, 《L'histoire de (ou : des) Hervas et
le savoir encyclopédique》, in *Le Manuscrit trouvé à Saragosse et ses interceptes*, études réunies
et présentées par Jan Herman, Paul Pelckmans et François Rosset, Peeters, Louvain, 2001,
p. 189-203.

て再考が促されるのである。

ディエゴ・エルバスの物語の考察を締めくくるに当たって、ふたつの問題を指摘しておこう。ひとつは語り手プラス・エルバスについてである。先述の通り、プラスは後に、神に見捨てられた巡礼者となり、自らの魂と、他の十二人の人間の魂の救済を課せられることになる。ただし彼がこのような運命を強いられる理由は全く不明である。小説内にそれが示唆されている箇所は皆無である。唯一考えられることは、父親ディエゴの神をも恐れぬ学術的探求である。ただその「罪」は息子にまで及ぶというのか。また息子プラス・エルバスの物語の結末は明らかに、ファウスト伝説と結びついている。ゲーテの『ファウスト』第一部が発表されるのは一八〇八年のことだが、プラスにさまざまな恩恵を施すベリアルは、最後に彼に血の署名を迫るなど、その造形は明白にメフィストフェレスが下敷きとされている。だが悪魔が契約を迫るのは、通常、大学者ファウスト博士に対してである。ここでも息子プラスは、父である学者ディエゴの犠牲になっているのであろうか。

もうひとつ問題になるのは、この物語自体の信憑性である。そもそもこの物語は、このひとつ前の物語である「カプロネス氏の物語」につながっており、さらにそのひとつ前の「フラスケタ・サレロの物語」にも接続している。何とも事情は複雑だが、要するに「ディエゴ・エルバスの物語」は、夫カプロネス氏を怖がらせるために妻フラスケタが恋人と仕掛けた陰謀のひとつの駒に過ぎないのである。この事実は、後に物語の聞き手であるレベッカから指摘されることになる。「でもあわれな夫を騙すにしてみれば、手が込みすぎている気がするわ。そこまでしなくても目的は遂げられるでしょうに。だって、無神論者の物語は、ただただあの小心者のカプロネスさんの心に、さらに深い印象を残すためだけに語られているんでしょう。」(p. 351) 内容の深さから言っても、また物語の規模から言っても、『サラゴサ手稿』内における「ディエゴ・エルバスの物語」の位置は極めて重要なものだが、もしかしたらそれは全くの「作り話」かもしれないのである。

小説構成に当たってのボツツキの周到な準備と計算には、いつもながら舌を巻かされる。

Ⅱ. 学問と愛、またはエロス 「幾何学者ベラスケスの物語」

Ⅱ-1 幾何学と人の心、あるいは人生

次に取り上げたいのは、一八一〇年版では第五デカメロンの後半に置かれている「幾何学者ベラスケスの物語」である。この物語の語り手であり、かつ主人公でもあるのは幾何学者ペドロ・ベラスケスであるが、小説内におけるこの人物の重要性については、すでにさまざまな研究者によって指摘されている¹⁴。その存在感は、アルフォンスやジブシーの長老といった小説の他の主要人物に十分比肩する。ただしこの人物の実体は捉え難い。作品に初めて登場した瞬間から、ベラスケスの正体は揺れ動く。「(...) 手帳をじっと見ているあの男ですが、ペンナ・ベレスさまによれば、あれは幾何学者だということです。ただ私どもの司祭さまは、あれは悪魔つきだと言っておられますし、私が愚考するところによれば、あれは変わり者ですな。」(p. 410-411) さらに言えば、『サラゴサ手稿』の二つの異なる版を比較した場合、両者の間で最大の変化を被っている登場人物の一人がベラスケスである¹⁵。彼の作品内への登場は、一八〇四年版では第十八日であるのに対し、一八一〇年版では第四十一日と大幅に遅れる。このことによって、小説自体の構成が全面的に見直されることになる¹⁶。

¹⁴ 例えば以下の論文を参照。Dominique Triaire, 《Il était trois fois un géomètre...》, in *Jean Potocki ou le dédale des Lumières*, éd. par François Rosset et Dominique Triaire, Montpellier, Presses Universitaires de la Méditerranée, 2010, p. 349-384. Helmut Bertran, 《Le géomètre Velasquez dans le *Manuscrit trouvé à Saragosse*》, in *Lendemain*, n° 28, 2003, p.27-38.

¹⁵ この点については、次の論文を参照。Luc Fraisse, 《“Je ne sais plus qui parle ou qui écoute” : Velasquez et le problème du roman》, in *Jean Potocki à nouveau, op. cit.*, p. 213-228.

¹⁶ また一八〇四年版の特徴として、語られる物語の内容や形式が、小説の登場人物自身によって批判されるという現象がある。ベラスケスは、このような発言を最も頻繁に、また最も辛辣に行った人物である。だがこうした言説は、一八一〇年版ではほぼ全て削除されてしまう。

幾何学者ベラスケスという登場人物の最大の特徴は、あらゆる事象に方程式を当てはめていくということにある。彼にあっては、数学的に説明できない事柄はこの世に存在しない。自然界の物事は言うに及ばず、道德、宗教、人間の感情、ありとあらゆるものが彼にとっては演算の対象となる。例えば、人間の抱く感情の中でも最も不可解で、しばしば説明不能のようにも思われる恋愛感情ですら、ベラスケスにとっては数学的に解明することができる。

激しい恋心というのは、物を動かす原動力でもあるのです。それがなければ、この世のものはすべて止まってしまうでしょう。さらに、それは増減可能でもあります。そのことによって、恋心は幾何学の領域に入るのです。あなたがご質問になった恋愛に関してですが、この感情にはいくつかの特性があります。それらの特性は、整数の二項対立を導入することのできるあらゆる数値に共通するものなのです。ご説明いたしましょう。(p. 419)

実際ベラスケスは、「愛情」を正の値、その逆元となる「嫌悪」を負の値、そして「無関心」をゼロと定義づけ、その乗法によってこの感情を説明していく。つまり、愛情をそれ自身でかけ合わせていくと、〈私は愛情を好む〉、〈私は愛情を好むことを好む〉となり、常に値は正となる。プラス掛けるプラスは常にプラスとなるからである。だが〈私は愛情を嫌悪する〉となると、プラス掛けるマイナスとなり、値は負となる。だが〈私は嫌悪を嫌悪する〉となると、愛情の感情、言い換えれば、正の数量へと戻ることになる。マイナス掛けるマイナスはプラスになるからである。恋愛は時として、互いに対する反感、あるいは誤解から始まることがある。ベラスケスの数式はこうした事情を説明するものとなる。かくして数学は、人間の感情を読み解くための切れ味鋭い道具となる。「ドン・アイザック・ニュートン氏が考え出した二項定理の公式は、あらゆる計算の導きとなるのと同

様、人間の心の研究においても私たちを導いてくれるのです。」(p. 420)

またベラスケスによれば、人の人生もまた幾何学的に説明することができる。トレス・ロベラスは人生の前半をスペインで、その後半を新大陸メキシコで送った人物であるが、その生涯の間には何人かの女性との恋愛があった。ロベラスが五日間をかけて語る長い彼の人生の物語も、ベラスケスの目から見ればひとつの楕円問題に過ぎない。

あなたの生涯をたどっていくと、恋心が原動力になって、あなたが進むにつれ、あなたを高みに登らせていくのがわかります。人生の中頃ではあなたを支え、晩年になってもなお、それはあなたのよりどころとなっています。まるで閉曲線【閉じた曲線、ここでは楕円を指す】の縦座標が横座標に沿って進むのを見ているように思いました。それはまず一定の法則で増大し、軸の中央ではほぼ静止状態になり、それから増加したときと同じ割合で減少するのです。(p. 445-446)

実際ベラスケスは、ロベラスの年齢を長軸(x軸)に、彼を恋愛へと向かわせるその精神的エネルギーを短軸(y軸)に取り、このエネルギーが年齢とともにどのように増減するのかを説明する。そしてその値が描く軌道は、ここまでロベラスが語ってきた彼の恋愛の経歴とびたりと符号するのである。無論そこには作者ポトツキがとびきり入念に仕組んだ物語構造の綾があるわけだが、それと同時にまた、極端なまでに推し進められた数学の応用に、ある種盲信的な科学至上主義、とりわけ精密科学への崇拜に対するポトツキの皮肉な視線も見て取るべきであろう。

ベラスケスは常に覚書帳を持ち歩き、何かあるごとにそこに数字や数式を書きつけて計算を行っていく。極端に言えば、彼にとっては生きていくことと計算することはほぼ同義となっている。そうした彼が早くから学問の扉を開いたのは言うまでもない。詳しくは後に論じるが、彼は幾何学だけでなく、自然科学全般、ならびにヘブライ語をはじめとした各種古代言

語、諸民族の歴史や聖書解釈などにも広範な知識を持っている。「私は歴史も死語も、数や次元を学ぶのと同時に勉強したのです。」(p. 490) つまりディエゴ・エルバスと同じく、ベラスケスもまた「学者」の一族に属しているのである。そしてエルバスが人類の知識全般を扱う著作を完成させようと超人的な努力を傾けるのと同様に、ベラスケスもあるとき、その知識と考察をある独自の理論へと纏め上げようとする。

私はそのとき自分の持つ知識を新たなやり方で用いるようになり、それらのあるひとつの目的に向かわせていったのです。学者の生涯をたどれば、まるで雷に打たれたかのように、ある原理がふと脳裏に浮かび、その原理から導き出される結果を敷衍することで、いわば体系というものにたどりつくことができます。そのとき学者は勇氣と力を奮い起こし、すでに知っていることに立ち返り、まだ欠けていた知識を獲得することになります。(p. 472)

それが結実したものが、一八一〇年版の第四十九日と第五十日に置かれる長大な「ベラスケスの体系」である¹⁷。これは、創世記に見られる七日間におよぶ天地創造の物語を、ある種、理神論的な立場から再解釈しようと試みるものである。古代エジプトの秘儀に始まり、化学、動植物学、考古学、天文学、大陸移動説、古典解釈学など、極めて広範な学問の知識を寄せ集めて練り上げられたこの独自の宇宙開闢論は、非常に学術的な印象を与えると同時に、極めて荒唐無稽な空論でもあり、『サラゴサ手稿』という小説の後半の見せ場のひとつとなっている。ただ本論ではその内容に踏み込むことはせず¹⁸、あくまで学問の意義という観点から、幾何学者ベラ

¹⁷ 「ベラスケスの体系」は一八一〇年版にのみ現れ、一八〇四年版には見られない。この相違はおそらく、一八〇四年版が途中で放棄されたことの原因のひとつであるはずである。

¹⁸ 「ベラスケスの体系」を、当時のヨーロッパの知的背景に結びつける先述の次の論文は示唆に富む。ただし底本とされているのが、現在では問題があるとされている一九八九年刊行のラドリザニ版であるのが残念な点である。Bertram, 《Le géomètre Velasquez dans le "Manuscrit trouvé à Saragosse" de Jan Potocki》, art. cit.

スケスという特異な人物像を考察していきたい。

Ⅱ-2 ぼんやり者の幾何学者

彼が作り出した「体系」が示す通り、幾何学者ベラスケスは、広大な学識と、優れた観察眼、さらには卓越した頭脳を備えた人物である。学者としての資質は申し分ない。ただこの小説を読み解くにあたっては、全てが一筋縄ではいかないのが通常である。物語の筋立て、構造、登場人物の性格などは絶えず疑問に付され、再解釈を迫られる。主人公アルフォンスは言う。「俺の方は、今見聞きした事柄をよく考えようとその場を離れた。だが考えれば考えるほど、よく分からなくなるのだった。」(p. 214) ベラスケスもまた、単なる博学な学者としてだけでは片付けることはできない。なぜなら彼には、通常学問とは相容れない、ある気質上の不具合があるからである。

その不具合とは、「ぼんやりしている」(distract)ということである。この気質は彼が物語に登場した瞬間から明らかになる。この時、ベラスケスは計算に夢中になるあまり、仲間に渡されたレモネードのコップに鉛筆を浸してしまふ。つまり、自分が持っているのは鉛筆ではなくペンだと勘違いし、さらにレモネードのコップをインク壺と取り違えてしまうのである。(p. 414) これ以外にも彼は数々の失敗を犯すが、いずれも不注意によるものである¹⁹。このようにぼんやりした人間が、高い集中力が求められる学問に取り組むことなどできるのであろうか。この点に関して、フィリップ・グローズは、星空の観察に夢中になるあまり、溝に落ちてしまった古代ギリシアの哲学者タレスを引き合いに出している²⁰。高度な学識と日常生活における不注意というのは、一般に考えられているほど相矛盾するも

¹⁹ 一八〇四年版では、ベラスケスの不注意ぶりはさらに強調されている。ある時には、自分が池に落ちたにも関わらず、落ちたのは自分を池から引き上げてくれたアルフォンスだと思い込んだり (1804, p. 194)、またある時には、鉛筆をココアに浸し、うまく書けないと見るや、それを隣にいるレベッカのスカートで拭ったりする。(1804, p. 193)

²⁰ Voir Philippe Grosos, «Jean Potocki ou l'expérience de l'intotalisable», in *Études de lettres*, n° 4, 2012, p. 18.

のではないのかもしれない。

いずれにせよ、ベラスケスは自分のこの性格を自覚している。彼によれば、誰かが話しかけてきてもそれはほとんど耳に入らず、ただ最後のいくつかの単語が記憶の中に残るだけで、それに対して答えるにしても、話しかけられてから一時間も二時間も後になってしまうのだという。さらに、しばしばどこに行くのか分からないまま歩いているというようなこともあり、盲人のように道案内が必要となるかもしれない。(p. 490) ただ本人に言わせれば、それはむしろ気ぜわしい現代人の性格に原因があるのだという。彼らが交わす会話では、話題はまるで全速力で駆けさせている馬から馬へと飛び移るヌミディア人【北アフリカに住むベルベル系の半遊牧民】のように目まぐるしく移り変わる。物事をじっくりと考えるためには、もっとゆっくりとした精神のあり方が必要であろう。ベラスケスによれば、それは例えばチェスをするのに手紙を使うというようなやり方、つまり一手進めるのに、郵便配達が来る日を待たなければならないというような心の持ち具合が必要となるとされる。

常にうわの空の学者ベラスケスがその本領を遺憾無く発揮するのは、おそらく美しいユダヤ女レベッカから名前を尋ねられたときのことである。驚くべきことに、彼は自分自身の名前を思い出せないのである。

「お嬢さん」幾何学者は言った。「私の名前は… えーと名前は…」

そう言うと、彼はポケットを探して、覚書帳を取り出そうとしているようだった。

「何ですって」レベッカは言った。「あなたはどこかぼんやりしたところのある方だと思っていました。でも、ご自分の名前を忘れるほどぼんやりしてらっしゃるなんて信じられませんわ。」(p. 448)

実際、ベラスケスは自分の名前をあらかじめ覚書帳に書いておき、名前を聞かれたり、署名をしなければならぬ段になると、それを見て確認する

という習慣にしているのである。何とも不条理であると同時に滑稽な設定だが、注意しなければならないのは、実はこの挿話は幾何学者の父親エンリケ・ベラスケスの物語を導くための伏線になっているのである。

Ⅱ-3 ベラスケスの父、エンリケの悲運

エンリケ・ベラスケスは、後の幾何学者ペドロ・ベラスケスがこの世に誕生した時、奇妙な祈りを天に捧げている。

指数関数にとって無限性を持つ通約できない累乗よ、あらゆる増加数列の最終項よ、わが神よ！ あなたは今またこの世に、感じやすいひとつの存在を投げ出された。もしこの子が、その父がかつてそうであったように、みじめな人生を送らねばならないのであれば、どうかこの子に減算の記号をつけてやってください！（p. 461）

数学用語が散りばめられたこの祈りを口にするエンリケは、彼自身、優れた学者であり、かつてはスペイン随一との評判を取ったほどの頭脳の持ち主である。早熟な天分に恵まれ、早々にして「人類の英知の総体を把握」（p. 449）してしまうことになる。つまり彼もまた、ディエゴ・エルバスと同じ夢を追求める人物なのである。

ただし同じく不幸になるにしても、エンリケが絶望に陥れられる理由は、ディエゴ・エルバスの時の状況とはまるで異なる。息子ペドロが生まれた時に、天に向かって幾何学的な祈りを捧げたエンリケは、その後すぐに赤ん坊を胸に抱きしめ、次のように言う。

いや、かわいそうな子。お前は決して私のように不幸になってはいけない。私は神の聖なる名にかけて誓う。お前には決して数学は教えない。お前はサラバンドを学ぶのだ。ルイ十四世のバレエや、私が思いつく限りの無作法をすべて覚えるのだ。（*Ibid.*）

サラバンドとは、十六世紀後半にアメリカ大陸からスペインに伝わった舞曲のことで、主にフランスで改良され、流行していく²¹。息子には学問をさせず、代わりにこうした舞曲や、思いつく限りの無作法を教え込むなどというのは、通常の父親の教育方針とは正反対のもののように思える。だがエンリケは息子を育てるに当たって、あくまでこの方針を貫こうとする。息子が九歳になった時も「自分の名前が書けて、サラバンドを踊ることさえできれば、それで十分だ」(p. 464)とし、また十二歳になり、さまざまな知識を身につけ始めた息子に対しても「サラバンドを学べ、息子よ。サラバンドを学ぶのだ。お前を不幸にしかない事柄は放っておけ！」(p. 465)と叱責する。息子が学問の方に向かいかけると直ちにその道を阻み、ルイ十四世の宮廷に出て恥ずかしくないだけの礼儀作法のみを身につけさせようとする。この奇妙な養育法の根底には実は父エンリケ自身が被った悲運がある。

幼少期に父を失ったエンリケとカルロスの兄弟は、親戚の公爵の元で育てられる。二人の性格は正反対で、兄エンリケがまじめで、熱心に勉学に取り組むのに対し、弟カルロスは軽薄で、だらしなく、何かに打ち込むということのできない人間である。二人の性格の相違を見て取った公爵はエンリケを自分の娘ブランカの婿に決め、カルロスをフランスの親戚のところへ送ってしまう。エンリケは国家が開催した城塞の改築計画案のコンクールで見事一等を獲得する。こうして彼は輝かしい砲兵隊大將の地位を約束され、晴れてブランカと結婚する日を待つことになる。公爵に何か褒美を与えられたと言われたエンリケは、弟カルロスをパリから呼び戻してもらうことを願う。願いは叶えられ、ついにカルロスが帰還してくる。その報を耳にしたエンリケは、喜びのあまり、砲兵隊大將の職を願い出る大臣宛の手紙に誤って弟の名前で署名をしてしまうのである。

²¹ スペインでは扇情的で卑猥だと見なされ後に禁止された。フランスではメヌエットに近いものになる。一六三五年には宰相リュクセリュールが、ルイ十三世の王妃であり、ルイ十四世の母であるアンヌ・ドートリッシュの前で「浮かれたサラバンド」(Folle sarabande)を披露している。

カルロスはルイ十四世の宮廷風の優雅な礼儀作法を持ち帰り、スペイン人の服装やしきたりを馬鹿にする。実際、華やかなカルロスの身のこなしは人々を魅惑する。とりわけ彼の帰還を祝うパーティでカルロスが踊ったサラバンドの踊りは決定的な役割を果たし、ブランカはエンリケよりもカルロスに恋をしてしまう。悲嘆に沈むエンリケに大臣からの手紙が追い打ちをかける。大臣は、砲兵隊大将の地位にエンリケではなく、カルロスを指名したのである。こうして名誉も地位も恋人も失ったエンリケは、精神に異常をきたしてしまう。

父となったエンリケが、息子ペドロに学問を禁じ、代わりにサラバンドをはじめとした舞踏や礼儀作法を叩き込もうとしたのはそのためである。かつて彼に約束されていた地位、名声、そして恋人を実際に手にすることになったのは、サラバンドを見事に踊る、優雅だが軽薄極まりない弟であった。エンリケは自らの不幸を繰り返させないために、世の父親とは真逆の教育方針で息子を育てようとするのである。ちなみにその息子ペドロが自分の名前を覚書帳に書いておき、名前を間違わないようにと常々配慮するのは、この父の轍を踏まないためである。

だが身も心も打ちのめされたエンリケを救うことになるのは、やはり学問である。病から回復したエンリケは、アフリカ北端のスペインの飛地領セウタの城塞の長官に任命される。彼は熱心に任務に取り組み、この地の住人の幸せを願い、福祉を充実させていく。忙しい長官としての仕事の合間に、彼が気晴らしを求めるのが学問である。当時ヨーロッパでは、等周問題に関する難問をめぐる激しい議論が戦わされていた。エンリケは匿名でいくつかの分析方法を論戦を繰り広げる数学者たちに送ってやる。それはまさに解法上の傑作とも言えるもので、人々はその独創性に驚く。

ただしエンリケは徹底して自分の名前を伏せる。彼の学問への情熱には、自分の名前を高めようなどという野心は一切含まれていない。この点でエンリケは、百巻の著作を世に出すことで、一気に栄誉を獲得しようとしたディエゴ・エルバスとは決定的に異なる。エルバスにあっては、時に自己

愛が学問愛をしのぎ、それが彼の破滅の原因となったわけだが、エンリケはあくまでも純粋な学問愛から、学問に取り組むのである。「父は学問を愛していたのであり、学問がもたらす名声についてはどうでもよかったのです。」(p. 459) ただしそれは孤独な仕事である。エンリケは、自らを「追放された者の種族」(p. 475) と称する。世に埋もれ、名誉や富などとは全く無縁な地平で、ただ純粋に学問に対する関心から高度な問題に取り組む。そうした場合、学問は人生の苦しみへのある種の癒しとなる。

まったく、あのときのわしの喜びといたら！ 匿名で書いたわしの論文のひとつをドン・アイザック・ニュートン殿が評価してくれて、誰がそれを書いたのか知りたいと言っているとのことだったのだ。わしは名乗り出はしなかった。だがさらに努力を傾け、新たな思索を行うことで、自分の知性を充実させていった。(p. 476)

この言葉に、『サラゴサ手稿』における学問の意義のひとつの表れを見ることができる。エンリケによれば、かつて彼が不幸になった原因は、学問を足がかりとして、名誉と地位と恋人を得ようという「野心」を抱いたことにある。無論、「野心」と称しては気の毒なほど、それは未来ある青年にとっては当然の願いである。だがさまざまな不運をなめた後、セウタでようやく心の平安を取り戻したエンリケの考えでは、学問とはあくまで人知れず、またそれ自身を目的として行われなければならないものなのである。そして、そうした場合の学問は「人に知られず、また孤独なものだが、甘美で、混じりけのない」(Ibid.) 喜びをもたらしてくれるのである。

Ⅱ-4 女性の誘惑と幾何学

自らの不幸を繰り返さまいと、エンリケは息子ペドロには学問をすることを禁じ、代わりに優雅で軽佻なフランス式の礼儀作法を学ばせようとする。ペドロにはフランス人の舞踏教師がつけられ、強制的にサラバンド

を学ばせられる。だが教師の横柄さと軽薄さとに我慢がならず、ペドロは教師の使う小さなヴァイオリンを叩き割ってしまう。罰として小部屋に閉じ込められたペドロだが、嘆きながらも、そこで新たな発見をする。部屋の窓にはめられたガラスの数を、縦や横に数えていくうちに、掛け算の仕組みを理解してしまうのである。幽閉された小部屋で、突如ペドロは大きな喜びを感じる。

それから私はとてつもない熱意を傾けて計算に取り組みました。自分は今、世にも素晴らしい発見をしているのだと信じ込んでいたのです。実際、数の持つ特性は真の発見でした。私はそれらをこれまで全く知らなかったのです。(p. 468)

こうしてペドロは幾何学者ベラスケスとなっていく。世の中のあらゆる事象に方程式を当てはめ、恋愛感情といった複雑な人間の心の動きまで数学的に説明する人物が誕生するのはこうした経緯によるのである。当然、父エンリケの悲しみは深い。「息子よ、お前はやはり無作法な振る舞いをするようには生まれついてはおらぬ。お前の人生も、わしの人生と同じく、幸せなものにはならぬな。」(p. 470)

幾何学を用いて恋愛を見事に解説するベラスケスだが、彼はそれを実際に自分の身に当てはめることができるのであろうか。ここで重要なのは、ベラスケスは必ずしも学問にしか興味のない、非情な学者であるわけではないということである。彼は実際に人に恋をし、愛情を抱くことのできる人間である。ベラスケスの想い人となるのは、美しきユダヤ女レベッカである。

「お嬢さん」彼はユダヤ女に言った。「今朝は、あなたのことをずっと考えていました。でもお名前がわからないので、あなたのことを x か、 y か、 z で呼びしなければなりませんでした。未知数についてはそ

うした記号を使うものなのです。いっそのこと、お名前をおっしゃっていただければ、こうした困った事態から抜け出せるのですが。」
(p. 421)

恋の告白にもこうした数学用語が溢れていくわけだが、この奇妙な恋は最終的に成就することになる。小説の結末で、幾何学者ベラスケスがユダヤ女レベッカと結婚したことが明かされるのである。

ベラスケスがレベッカに恋心を抱くのは偶然ではない。語りの合間ごとに、ベラスケスは今聞いたばかりの物語について幾何学的な批評を加えていく。それを唯一理解することができる聞き手がレベッカであるからである。火山の爆発の問題、無限大と無限小、ニュートンの『プリンキピア』など、ベラスケスが開陳するが、他の聞き手には全く理解できない話題の筋道をレベッカは正確に辿っていく。その状況をアルフォンスは次のように描写している。

俺は三つの物体の問題というのが何なのか知らなかったし、今でも知らない。だがきわめて高度な幾何学に属する事柄であることはわかった。見知らぬあの男がレベッカの返事にうっとりとしているように思えたからだ。男は愛情のこもった目で彼女を眺めると、こう言った。

「そうなんです、かわいいラウラ、あなたは完全に正しいのです。こうした計算はあなたにこそふさわしいのでしょうね。(…) (p. 438)

ただしレベッカはベラスケスにとって、例外的な女性である。分野こそ違え、レベッカもまたカバラという学問を幼少期から修めた知的な人物であるからである。彼女の持つ知識、理解力、頭脳に加え、学問とは何かということを知っているという事実が、ベラスケスを彼女に引きつけることになる。

だがレベッカのような高度な知性を備えているわけではないが、極めて魅力的な女性たちがベラスケスを三度にわたって誘惑してくる。それは彼の継母アントニアとその侍女マリカである。ベラスケスの母が亡くなると、エンリケはその異母姉妹であるアントニアと再婚する。この若くて美しい継母は、侍女マリカと共に何かとベラスケスの世話を焼いてくれるが、彼としてはありがた迷惑である。何しろ部屋に入ってこられるたびに、計算が中断されてしまうからである。ある時、ベラスケスが対数計算をしていると、アントニアが部屋に入ってくる。それから部屋が暑いと言って、次々に身につけているものを脱いでいく。この明らかな性的な挑発に対し、幾何学者は全く動じない。対数表を閉じると、その特質について考えをめぐらせるのである。するとアントニアは彼の背後に回り、両手でその目をふさぐとこのように言う。「さあ、計算してごらんなさいな、幾何学者さん。」(p. 471) この誘惑の言葉を、幾何学者は文字通りに受け取ってしまう。つまり対数表は彼の記憶に刻み込まれており、それを見ずとも因数に分解することができることを証明しようと試み始めるのである。こうしたベラスケスの鈍感で場違いな態度に、アントニアは「幾何学者のばか者め！」という言葉を投げかけて憤然と部屋から出て行く。

二度目の誘惑も同じような状況で始まる。ベラスケスが微分方程式を解いている時に、アントニアが、ほとんど肌着姿で部屋に入ってくるのである。そしてさまざまに媚を売った後、彼女は次のような言葉を発する。「おばかな甥御さん、幾何学は、どのようにして子供を作るかを教えてくれて？」(p. 472) 誘惑の文句はこのように前回よりもさらに直接的なものとなる。だがベラスケスの反応は変わらない。彼はその言葉から、自然界で行われているさまざまな繁殖の形態についての見解を求められているのだと考えるのである。こうして、杉の木から地衣類にいたるまで、あるいは、鯨のような大きな動物から、顕微鏡でないと見えないような微小生物にいたるまで、あらゆる生物が行なっている繁殖形態についての全般的な考察が始まっていく。

このように二度にわたる継母アントニアの誘惑は、ただベラスケスの研究熱を煽るだけの効果しかもたらさない。むしろアントニアの甘いさやきが触媒のように作用して、ベラスケスがそれまで考えてもみななかった知的冒険が開始されるのである。マキシム・ガペラは、継母アントニアの誘惑によって発動するベラスケスの頭脳の興奮を、「知的領域におけるオルガスム」と称している²²。アントニアの試みは、ベラスケスの肉体を燃え立たせるのではなく、その頭脳を沸騰させるのである。

ただし三度目の誘惑ではいささか成り行きが異なる。後述のようにその原因はおそらく、誘惑が行われる場所にある。ベラスケスはある時、セウタを出てマドリードへと旅をし、その途中で、打ち捨てられた旅籠で一夜を過ごすことになる。真夜中ごろ、音がするので目を覚ますと、なんと継母のアントニアが侍女のマリカとともに部屋に入ってくる。父エンリケから書類を渡すようにと頼まれたのだという。書類には「円積問題の証明」と書かれている。

このような不思議な現象が起こるのには訳がある。というのも、この夜ベラスケスが泊まった宿屋は、高名なベンタ・ケマダであるからだ。これまでも何人もの小説の登場人物が、この宿屋で夜を過ごし、不可思議な体験をしている。そして多くの場合、その体験は、真夜中に二人の女性（レベッカの場合は男性）が訪れてくるという形で始まるのである。セウタにいないはずの継母と侍女が突如、シエラ・モレナ山脈にある宿屋に姿を現すというのはこの文脈で説明できる。二人の女性は、ベラスケスが証明に夢中になっているのをよいことに、彼のベッドに潜り込んでしまう。ちなみに一人の男性を二人の女性が誘惑するというのは、主人公アルフォンスとその従姉妹エミナとジベダをはじめ、『サラゴサ手稿』の中で何度も変奏されるライトモチーフである。

その間にも、ベンタ・ケマダの妖力はベラスケスを包み始める。証明を

²² Voir Maxime Gabella, «Géométrie et libido dans *le Manuscrit trouvé à Saragosse* (version de 1810)», in *Études de lettres*, n° 4, 2012, p. 80.

やり直してみると、最初に見つけていたはずの間違いがもはやどこにあったのかわからなくなってしまう。さらに夕食時に飲んだワインで頭がぼうっとしてきてしまい、求められるがままに、アントニアとマリカに、書類を運んでくれたことに対するお礼のキスをしてしまう。ベラスケスはさらに証明をやり直そうとするが、無駄である。今度こそ、彼は二人の誘惑に屈するのである。

また問題に取り掛かろうとしましたが、同衾の二人が両腕でぎゅっと私を抱きしめてくるので、身を解くのは不可能なことに思えました。でも実は、身を解こうなどとはもう思っていなかったのです。というのも、自分の中に計り知れない感情が沸き起こるのを感じたのです。体の表面全て、とりわけふたりの女性に触れている箇所、新たな感覚が生まれます。それは接触曲線のいくつかの特性を思い起こさせました。(…)とうとう私の感覚は無限上昇級数へと展開し、そのあとに続いたのは、眠りと、たいそう不快な目覚めでした。(p. 481)

こうして三度目にしてついに、ベラスケスの数学に対する熱意は、女性の性的魅力の前に白旗を掲げるのである。ただこのエピソードをもってして、ソフィアに対するエロスの勝利と考えてはならない。ベラスケスが官能に支配されたのは、必ずしも彼の学問に対する情熱が弱かったからではなく、あくまで『サラゴサ草稿』という小説の根本を支えるベンタ・ケマダというある種の結界の力がそこに作用した結果なのである。

終わりに

『サラゴサ手稿』において、学問はまるで麻薬のようにある種の人々を惹きつけてやまない。どんなに苦労があろうと、またどんな悲運に見舞われようと、彼らはそれらを努力と忍耐によって乗り越え、人類の知を拡張

させるべく奮闘する。意識的か無意識的かはともかく、ディエゴ・エルバスは自己愛に突き動かされ、自らの名前を広めることを望むが、それでも人類の持つあらゆる知識に関する百巻の著作を完成させようという彼の超人的な試みの根底には、学問に対する深い愛があることは間違いない。エンリケ・ベラスケスは、学者として輝かしいスタートを切りながら、自分の名前を誤って署名してしまったことで全てを失ってしまう。だが孤独な彼を慰めるのはやはり学問である。その息子ペドロ・ベラスケスは女性の性的魅力よりもむしろ数学を好む。彼のリビドーは肉体よりもむしろ知能に宿っている²³。

だがこの小説において、人間の知識や学問の意義は一義的ではない。ディエゴ・エルバスや、エンリケ・ベラスケス——彼の人生への学問の影響は間接的ではあるが——の生涯を見る限り、学問は必ずしもそれに携わる人間を幸福にはしない。ディエゴ・エルバスもエンリケ・ベラスケスも学問をすることによって結果的に世間から遠ざけられる。エンリケがその息子ペドロに学問を禁じ、サラバンドをはじめとした礼儀作法を教えようとしたのは、前者が否応なく自己に閉じこもる道を辿らせるのに対し、後者は人々と交わる手段を与えてくれるからである。学問を追求した先には孤独と不幸しかない。それがこの小説におけるひとつの見解なのであろうか。唯一例外に見えるのが、エンリケの息子ペドロである。幾何学者ベラスケスは、最終的に美しいユダヤ女レベッカと結婚し、子をもうけ、幸せな人生を送ることになる。だがそのような幸せが可能となるのは、常にぼんやりしているという彼の気質と引き換えとなる。そして逆説的だが、この気質のおかげで、彼は人々との交際を取り持つことができるのである。

論を締めくくるにあたって、学問の意義という問題に関するポトツキの

²³ マキシム・ガベラは、幾何学者ベラスケスの志向を、後にフロイトによって「リビドーの昇華」(la sublimation de la libido)と名づけられる現象と結びつけて論じている。これは性的エネルギーを、社会的に意味のある分野(例えば科学、芸術、思想など)に転化していくことを指す。Voir Gabella, «Géométrie et libido dans *le Manuscrit trouvé à Saragosse* (version de 1810)», art. cit., p. 80.

考えを知る上ではこの上なく重要になるあるエピソードについて考察してみよう²⁴。幾何学者ベラスケスはある時、歩きながら覚書帳に数式を書きつけていたが、計算に夢中になるあまり、知らぬ間に自分の住む要塞都市セウタの外へ出てしまう。気がついた時には、敵であるアラブ人たちに取り巻かれていた。身代金を払ってもらうので、命だけは助けてほしいと頼むベラスケスに対し、アラブ人のシャイフ【長老】は次のように言う。

よいか、ナザレの若者よ。(…)噂によれば、お前は父親同様、真人間だが、神がお前から理性の一部を取り上げなさったとのことじゃ。それを悲しむでないぞ。(…)頭のおかしい人間というのは、神のお力と、人間の知恵の虚しさの生きた証拠なのじゃ。(p. 473)

ベラスケスが常にぼんやりしていて、不注意から失敗ばかりしているという噂はアラブ人たちの耳にまで入っていたのである。シャイフの言葉を聞いて、ベラスケスは衝撃を受ける。「ロックとニュートンの後を追って、人類の知性の限界にまでたどり着いたはずだったのに。(…)その結果はどうだろう？ 頭のおかしくなった男と思われ、もはやまともな人間と呼べないような、愚かな存在と見なされているのだ。」(p. 474) こう考えたベラスケスは持っていた覚書帳を引き裂き、無意識のうちにサラバンドのステップを練習し始める。「ああ父上！ 僕にサラバンドや、その後考え出された無作法一般を学ばせたのは、全くもって正しいことでした。」(*Ibid.*) アラブ人たちは、ベラスケスが先ほどまで熱心に何かを覚書帳に書きつけていたのに、今度はいきなりそれを破り捨て、果ては踊り出すのを目にして、敬虔の気持ちを込めて次のように叫ぶ。「ハムデュラ、アッラー・ケリム！ 神を礼賛せよ、神は寛大なり！」そしてやはり身代金を要求する

²⁴ 幾何学者ベラスケスという登場人物を考えるにあたってのこのエピソードの重要性については、ベルトラムも強調するところである。Voir Bertram, «Le géomètre Velasquez dans le "Manuscrit trouvé à Saragosse" de Jan Potocki», art. cit., p. 29

ことなどはせず、彼らはベラスケスをマラブー（聖者）として扱って、セウタの城門まで無事に連れて帰ってくれるのである。

このエピソードには、学問に対するポトツキの両義的な考えが明確に表れている。ある種の人間に学問が与えてくれる陶醉は、まさに我をも忘れさせるほどの力を持っている。それは、自らの名を高めたいという功名心や、人知をさらに拡張しようというある種の使命感を超越したところで、ただそれに身をゆだねるだけで忘我の境地に入ることのできる混じり気のない至福となるのである。それゆえ学問とはエゴイストなものとなる。いくら尤もらしく、またいくら高尚な言い訳が添えられたにしても、学問とは所詮は個人の快樂のために存在するものなのである。アラブ人がベラスケスをマラブー（聖者）と見なしたのは、彼を生まれたての赤ん坊と同一視したからである。「善悪の区別のつかぬ、頭のおかしい人間というのは、かつて無垢の状態にあった人間のようなものじゃ。第一級の清らかさを持っている。」（*Ibid.*）すなわち学問に夢中になる人間というのは、自らの生理的欲求や快樂のためだけに生きる乳飲み子と変わらないとされるのである。学問の意義に対するポトツキの懷疑は深い。